
SKY EARTH ~竜と子~

齋藤ノベオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SKY EARTH ～竜と子～

【Nコード】

N4934Y

【作者名】

齋藤ノベオ

【あらすじ】

エネルギー資源が枯渇した世界。人々は資源が余っている地域に密集していた。大空では、戦闘機の代わりに、遺伝子操作によって生み出された「ドラゴン」が支配している。そして、残された資源を巡って人々は、しだいに対立の溝を深めつつあった。

草原。

青々と生い茂った草むらが、延々と続く大地。周囲の山々には、立派な木々がそびえ立っている。昼下がりの陽光が、なびく程度の風と、うまい具合に調和しており、この上なく穏やかな風景を作り出している。

その風景には、ある一人の少年も含まれていた。

黒い短髪に茶色い瞳、年の瀬は十四か十五か、目立った特徴はないが、どことなく大人びた雰囲気を身に纏っている。

その少年は、草原の真ん中に腰を下ろし、ある一点をぼんやりと見つめていた。

視線の先には、自分が住んでいる村があった。少年の日課は、暇なときに村の外に出て、適当な場所でのんびりと過ごすことだった。そして最近のお気に入りは、自分の住んでいる村一面を見下ろせる、この草原らしい。

しかし、今この少年の心は、激しく動揺していた。

理由は、いつも自分をいじめているクラスメイトが、数人の仲間を引き連れて、この草原を登っているのに気が付いたからだ。

それでも少年は、腰を上げることは無かった。

内心ではすぐにも見つからないように逃げ出したかったが、そんなことをすれば後ろ指をさされて笑われるか、走って追いつかれるかのどちらかだった。

だから、少年は自分の中の妙なプライドと闘いながら、いじめっ子が目の前に到着するまでじっと動かなかった。

「お前ここで何してんの？」

いじめっ子が語りかけてくる。

俺がどこで何をしていようとお前には関係ない。それに、いかに馬鹿丸出しのしゃべり方だな。

心の中ではさまざまな言葉が浮かんでは消えていくが、実際に口に出して言った言葉は、

「いや、別に……」

という、あまり意味を持たない言葉だった。

「めっちゃん良い場所じゃん、ここ！」

「今度からここにしようぜ！」

なかば少年を無視するかたちで、いじめっ子の金魚のフィン達が騒ぎ出す。

一体、今度からここで何をするつもりなのか、少年には分からなかったが、今回の件で晴れて草原が「立ち入り禁止区域」に指定されたことは理解出来た。

「というわけで……どいてくんない？」

いじめっ子が聞いてきた。

一体全体、何が「というわけ」なのかサツパリだったが、少年は自分の中の危険信号に従い、潔くその場を後にしようとした。

しかし、金魚のフィンの中の一人が、余計なことを言い出す。

「そういえば俺、この前『新技』覚えたんだよね！」

「マジで！？ 見せてくれよ！」

金魚のフンの一人が言っている「新技」とは、恐らくプロレスまがいの技のことだろう。少年は長年の経験からすぐに察しが付いた。新技を会得したフィンが言う。

「お前ここに横になつてくんねえ？」

すかさず、嘘を吐いた。

「俺、今から用事あるんだけど……」

「あ？」

いじめっ子が威嚇する。

「じゃあお前、俺に横にされんのと、自分で横になるの、どっちが良いんだよ？」

出た。

いじめっ子はいじめる対象に対して、よく分からない二択を迫る。

少年はいじめられる者にしか分からない人間観察に長けていた。

少年はおとなしく後者を選び、自ら横になる。その脇で、にやにやと笑っているフンが「どんな二択だよ」と突っ込んでいた。

ある意味、一番タチの悪い人種がこいつだ。

自分はあるえて直接手を下さず、いざとなったら蚊帳の外と言いつけるクソ野郎。

そんな考え事をしているうちに、「いくぜ！」という掛け声と共にかかと落としが落ちてきた。

「うぐ！」

「ハハ！ 『うぐ！』だつてさ、ハハハハ！」

どうして自分は、こんな同い年の連中のストレス発散になっているのだろうか。

調子が上がってきたのか、いじめっ子やフン達が一人ひとり訳の分からない「技」を披露してくる中、少年は早く終わってくれと願っていた。

しかし、そんな少年の目に飛び込んできたのは、いじめっ子とフンの一人が互いに肩を組んで、少年に向かって膝蹴りをしようとしている光景だった。

やめてくれ、そんな勢いで蹴られたら……。少年はとっさに目を閉じた。

すると次の瞬間、少年の身体を吹き飛ばすかのように、恐ろしい勢いの突風が過ぎていった。

いじめっ子とフンの一人は、空中に跳ねた状態で突風を受けたため、風に飛ばされた洗濯物のように吹き飛ばされていった。他のフン達も何人か吹き飛ばされ、運よく残ったフンも、なぜか悲鳴を上げながら草原を下っていった。

少年はしばらく目を閉じていた。

いじめっ子達がなぜ突然吹き飛んでいったのか、確かに気になるが、今の少年にはそれ以上に気になっていることがあった。

まず、なぜか少年は日陰で仰向けになっていた。

草原には背の高い木々も、ましてや建物さえないのに、なぜか少年のいる場所だけが日陰になっていた。

そしてもう一つ、自分の真上から、獣のような荒い息づかいが聞こえてくる。

少年は、恐る恐る目を開いた。

すると、少年の目の前に広がったのは、猛々しいほどの「黒」だった。

いや、よく見てみると、それが一枚一枚の鱗の輝きだと分かる。

それを目で追っていくと、立派な翼手へと辿り着き、そこから目を離すと、一枚の大きな翼だと分かる。

そして少年は、その猛々しい「黒」と、目を合わせた。

その「黒」は、自分と同じ茶色い眼を持ち、自分と正反対の勇ましさを持つ黒竜だった。

少年は言葉が出ず、その黒竜の眼から目をそらすことが出来なかった。

エネルギー資源が枯渇した世界。燃料消費が激しい戦闘機に代わって、新たな兵器として生み出された生物兵器。竜。

今では大空を支配し、管理する役割を持ったこの生物が、なぜこんな場所にいるのだろうか。そもそもなぜ自分を助けたのか。

少年の頭が疑問で埋め尽くされている中、黒竜はその巨大な鼻先を少年の身体に押し付ける。少年は石のように固まった。すると、

黒竜は何事も無かったのように身を翻すと、足音を響かせながら少年から離れていく。

思わず立ち上がった少年は、黒竜の後ろ姿を追いながらも、自分は今何をすべきか思いあぐねていた。黒竜の肩口に古い傷跡のようなものが見えた瞬間、大きく羽ばたきながら黒竜は空へと飛び去っていった。

空高く昇っていく黒竜を見ながら少年は、「肩口……傷……黒……

…」と呟いていた。

少年はその竜の特徴を掴んでおかなければならなかった。
少年はこの出来事を覚えておかなければならなかった。
今度は、最後まで目を合わせなければならなかったから。

そして、六年の月日が流れた。

(後書き)

連載小説『SKY EARTH』に続きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4934y/>

SKY EARTH ~竜と子~

2011年11月14日03時23分発行